



TITLE:

# 月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考證(上)

AUTHOR(S):

内田, 吟風

---

CITATION:

内田, 吟風. 月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考證(上). 東洋史研究 1938, 3(4): 293-320

ISSUE DATE:

1938-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145617>

RIGHT:

# 月氏のバクトリア遷移に關する地理的年代的考證(上)

内 田 吟 風

## 一、序 言

月氏が西紀前第二世紀、敦煌・天山東部間の佳地を匈奴に奪はれて伊犁地方に遷り、幾も無くして復た烏孫に追はれ、葱嶺を越えて遂にオクズス河畔、バクトリアに移住して大月氏國を建設せる事件は、匈奴族(Huns)・蒙古族のそれにも次ぐ處の東亞民族の西方進出にして、東・中亞民族間に大變動を起したものであるが、殊に此の大月氏國の西移は彼の有名なる漢の張騫の遠征の原因となつたものであり、而も此の張騫の遠征が、大宛・康居・大月氏・大夏其他の西域 Oxus-Tarates 河畔諸國と漢との通交貿易を齎し、やがては漢文化と希臘及イラン文化の最初の交流を生じたことに於て重大な意味を有つものである。<sup>③</sup>

斯様に月氏の西遷は東洋史上の重大問題であるが、而も尙史料の僅少や其他の事由よりして之が詳確なる考證は未だ充分に完成せられたとは謂へないのである。余は前に此月氏及西域と重要なる關係を有せる匈奴の歴史及び其後身たるフンに就て若干の考察を試みたる折、此月氏遷移に關係ありて而も前人の餘り注意せざりし一二の史料を採録し、且諸史料に對しても從來と稍異なる觀方を施して、本問題に對し多少の新解釋を導き得たかと思はれたので、其を茲に簡單に述べて大方の批判を得たいと思ふ。

勿論上述の如く此月氏遷移は東洋史上の重大問題なれば、歐洲に於ては夙に前々世紀たる第十八世紀に研究は開始され、爾

來今日に至る迄（非常なる關心を有たれてゐるトカラ語問題を別としても尙<sup>④</sup>）Klaproth, Richthofen, Lassen, Chavannes, Gutschmidt, Marguart, Franke, Hermann 諸氏其他の専門史家によりて多數の貴重なる研究が提示せられ來たつたこと而て本邦東洋史學界は遙に後れて之が研究に参加したに拘らず、現在我白鳥博士や恩師羽田博士等の論考が其間に在つて最も重要な研究の根幹をなしてゐることも周知の事實である。

然れば月氏問題考究には當然從來の諸研究を回顧紹介用せる上に於て爲さる可きであるが、斯は紙面の關係も有り、又殊には最近 *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* (Bd. 91—Heft II) 上 G. Haloun 博士の詳細なる説述 (Zur Ueetsi-Frage) あれば本篇では便宜上余の論述に極めて關係あるものゝみに止めた。尙、年代的地理的考證と題せるは、月氏遷移が東・中亞文化史上に及ぼせる影響等には未だ殆觸るゝに至らぬからである。

### 【第一節註】

- ① 從來燉煌南山間と謂はれたものであるが、實際は燉煌天山東部（カルクタグ）間なる可きことは後説の通りである。
- ② 月氏の種族に關しては或はチベット種となし或はトルコ種となし、異説甚多きも今は觸れず。又アーリア種となすものさへあるが、もし左様であるとせば古代人種分布の上に於ける更に重要な問題ともなるものである。
- ③ 當時の西方文明の東洋流入に關しては Hirth 氏其他諸研究あり、簡單には桑原博士「張騫の遠征」に見える。（更に古い西方文明の東流に關する考の批判については O. Franke, *Geschichte des chinesische Reiches* I. S. 46 を参考せよである。）當時の漢文明西漸は絹の輸出のみでなく著しかつた筈であるに拘はらず、未だ具體的究明の見られぬは遺憾である。

- ④ 言語問題の近況は山本達郎學士「トカラ語問題の動向」(歴史學研究六の三) A. Hermann (Tocharoi; Pauly-Kroll, *Realencyklopädie des klass. Altertums*. IV a. 1936) E. Schwenner (Tocharica; *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 65 Band. 1938) 等、に纏められてゐる。

## 二、月氏の故地

月氏の原住地に關する根本的な史料は史記大宛傳に見ゆる

始月氏居敦煌祁連間。及爲匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏而臣之。遂都媯水北爲王庭。

の一條であるが、(1)此の祁連の位置に關する解釋及び(2)西紀前二世紀前半頃迄月氏と共に敦煌祁連間に住んで居た(と考へられる)烏孫との隣接狀態に關する解釋とに據りて、此の月氏原住地の比定は異同を生ずる譯であるが、之は如何に決定す可きであるか。

(1) **祁連山の位置** 謂ふ迄も無く祁連とは山名で、漢書武帝紀の顔師古の注に「祁連、山也、匈奴謂天爲祁連、<sup>②</sup>祁音巨夷反、今鮮卑語尙然」とあり、又同書霍去病傳注に「祁連山……即天山也、匈奴謂天爲祁連」とある處であるが、然らば此の祁連山と漢代に天山と呼ばれたもの、及び今日の天山及び祁連山(南山々脈)と如何なる關係にあるものか。

白鳥博士は此問題に對し、(a)漢代の祁連山は南山中の山で今日の祁連山か但しは此の山脈中の他の一山の名であつたと察せられる。(b)漢代の天山は矢張り今日の天山の、東部なる山で、恐らく Karluk Tagであらう。(c)從つて月氏の故地と云はるゝ敦煌祁連間とは敦煌南山間の地方である。と云ふ說を「烏孫に就いての考」(一一の一)に於て實に十六頁を割いて論證せられたのであつて、其後此考は殆ど學界の定説となつてゐる觀がある。

漢代の天山を、今日の天山々脈中の東部、バルクル湖より東百里、哈密の北百二十里の地なる Karluk Tagに當つることは眞に鐵案にして動かす可からざるものである。然し乍ら漢代の祁連山を以て此の天山と全く別個のものとし、之を今の南山々脈中に求めること(爾來殆ど定説の如くなつてゐる)に對しては、余は少しく異說



を有するものである。

先づ第一に祁連山を今日の南山々脈中の祁連山とし、従つて月氏は敦煌南山間の小地域に（而も遊牧生活様式を以て）住居してゐたと考へることは、月氏が其後匈奴に惨敗して西方オクサス河畔に移りて直ちに大國（控弦の士二十萬を有し、人口百餘萬の大夏を臣屬）を建てたる事情と甚だ妥當しない様に思はれる。第二に祁連山を現在の祁連の如きタリムの東南隅に求むることは、匈奴史の大勢より非常に困難であることである。而して此第一の疑問は單に祁連を以て今日の祁連に非ざるべきことを指示するに過ぎざるも、第二の問題は具體的に祁連山の位置を決定すべきものを含むものと考へる。

元來匈奴は漢の文帝の頃より全體的に西方に勢力を移動して來たのであるが、武帝の元狩年間に單于是翁侯趙信の計に従ひ庭を漠北の遠きに遷し、唯時々兵を派して漢邊を侵し、以て漢軍が大舉遠征する時は長途糧食に困窮疲罷する様に策してゐたのであつて、從來祁連山を以て南山々脈中に求む可き證據として擧げられ來たりたる票騎將軍の祁連遠征記事（烏孫に就いての）（考史學雜誌十一）の如きも、實は漢の隴西北地より出發せる北方へ向けての大遠征であつて、決して南山々脈の如き近距離・西方への派遣でなかつたことは史記匈奴傳の記事のみよりしても明かなる處である。

即ち漢武帝は元朔六年（西紀前一二三）大將軍衛青をして六將軍十餘萬騎を以て匈奴を征したが、其時前將軍翁侯趙信は單于の兵と邂逅して敗れ、遂に降つて單于の自次王と爲り、單于の姉を娶りて妻とし、單于に漢軍を破る方策を教へて單于の居を漠北に遷さしめ、漢の遠征軍をして長途糧食に困窮せしめたことは、史記匈奴傳の詳記する處で、其一節に

信教單于、益北絕幕、以誘罷漢兵、徼極而取之、無近塞。單于從其計。其明年、胡騎萬人入谷、殺數百人。とある。是に於て漢の票騎將軍霍去病は萬騎を率ゐて隴西を出で、焉支山を過ぐる千餘里、匈奴を撃つて、かの有名なる休屠王の祭天金人を得たのであるが、其夏再び去病は數萬騎を率ゐて匈奴を祁連山に攻めたのである。史漢匈奴傳には、之に對して唯

其夏票騎將軍復與合騎侯數萬騎出隴西北地二千里、過居延、攻祁連山。得胡首虜三萬餘人（漢書作級）裨小王以下七十餘人（漢書無）。

とあるのみであるが、漢書金日磾傳には此の事を記して

其夏票騎復西過居延、攻祁連山、大克獲。

と西なる字を以て方角を示してゐるのである。而して居延とは白鳥博士の推察せられし如き河名（エチナ河に比定）に非ずして、今の居延海（嘎順諾爾）にして漢代等には居延澤とも稱せられたる湖であることは數多き諸例より明であるから、之に依つても祁連山の方角は略々決定する譯である。而して此の時、同書霍去病傳に據れば單于閼氏、王子五十九人、相國・將軍當戶都尉六十三人を獲て居て、此の祁連山が所謂上説の單于の「益北絕幕」の結果たる新なる單于の都たりしことも解るのであつて、匈奴傳によれば、漢は更に、單于が趙信の計に従ひて漠北に居、漢兵至り難しと考へてゐるので、元狩四年春大輜重隊を編成して衛青霍去病の二將軍をして遠征せしめたが、二將軍は俱に「絕幕擊匈奴」と約して定襄・代の二路より出で、漠北に待ち構へたる單于の精兵を撃破したのである。此の事實に對して漢書五行志中之下には

遣大將軍衛青霍去病、攻祁連、絕大幕、窮追單于、斬首十餘萬級。

と記してゐる。以上の史實より見ても、祁連山は今日の祁連の如き南山東隅の山でなく、單于が北徙した地方、沙漠を越えたる地方、居延海の西なる地方に存すること明にして、當時の天山即ち今の天山々脈の東部カルクタグ山と同一と見る外無きこと云ふ迄もない。

漢代、此の祁連山と天山とが同山異名なりしは、史記匈奴傳の記せる天漢二年李廣利が當時既に漢の領土となりし今の南山々脈祁連山附近の酒泉地方を出で、天山に匈奴右賢王を撃てる事實を、同書李將軍傳には祁連山と記してゐる事の外にも、尙鹽鐵論に上說衛青霍去病の祁連攻撃を「遂破祁連天山、散其聚黨」と記してゐるに徴しても全く明なことである。

以上の理由よりして余は、漢代の祁連山は（唐の顔師古の説及び其一聯の註解の如く）當時の天山にして、今の天山東部のカルクタグ山乃至其附近の山々に當つ可きものとすべく、從つて月氏の原住地なる敦煌祁連間とは實に近世の通説と全く反對に東部天山々麓より南敦煌に至る大地域であつたものと斷定するものである。

若し夫れ、史記匈奴列傳正義所引括地志に見ゆる

涼甘肅延沙等州地、本月氏國

或は又後漢書西羌傳に見ゆる

湟中月氏胡、其先大月氏之別也、舊在張掖酒泉地。

等の記載に至つては實に月氏が敦煌祁連即ち敦煌天山東部間の大地域より更に東方甘涼の内部に迄勢力を及ぼせることありしを物語るものにして、そは匈奴の未だ全く微弱なりし時代、支那に於ては秦始皇帝、匈奴に於ては頭曼單于以前の強盛なる月氏（當時匈奴太子冒頓を質子となし、強盛よく東方匈奴を壓迫して居た古い時代〔冒

頗に攻破せられる以前」の月氏）が後述の如く、元來烏孫の地なる瓜肅甘州地方に迄進出して居たことを物語る重要な文献と目さねばならぬものである。<sup>④</sup>

(2)、烏孫の故地との關係　烏孫族が月氏と共に敦煌祁連間に居住したる（如く見ゆる）ことは、漢書張騫傳に見ゆる張騫の武帝に説いた言

臣居匈奴中、聞、烏孫王號昆莫。昆莫父難兜靡、本與大月氏俱在祁連敦煌間小國也。大月氏攻殺難兜靡、奪其地。人民亡走匈奴。子新生。傳父布就翁侯抱亡、持歸匈奴。單于愛養之。及壯、以其父民衆與昆莫、使將兵、數有功。時月氏已爲匈奴所破。西擊塞王。塞王南走遠徙。月氏居其地。昆莫旣健、自請單于報父怨。遂西攻破大月氏。大月氏復西走。徙大夏地。昆莫略其衆、因留居、兵稍彊。會單于死、不肯復朝事匈奴。匈奴遣兵擊之。不勝。益以爲神而遠之。今單于新困於漢而昆莫地空、蠻夷戀故地。又貪漢物。誠以此時、厚賂烏孫、招以東居故地。漢遣公主爲夫人。結昆弟。其勢宜聽。則是斷匈奴右臂也。

とあるからである（同書西域傳も亦此言を簡單に載すが餘り簡約して意を損じてゐる）。

東西の東洋史家は從來すべてこの傳文を以て烏孫は月氏と共に敦煌祁連間に故地を有したものとした。而して白鳥博士は上述の如く敦煌祁連間を今の敦煌南山間とし、月氏の住地をば、後漢書西羌傳（上）等によりて張掖酒泉間附近に限定して考へられた爲、月氏の故地を甘肅州とし、烏孫の故地を以て、肅州以西敦煌に至る間とせられたのである（烏孫に就いての考史學雜誌一二。尙其後西河舊事の記事により）。然し乍ら、此の區分法は一に敦煌祁連間とは敦煌以東、南山並びの沙瓜肅甘涼の地なりとの見地より立てられしものたれば、余の到底承服し難き

ものであると謂はねばならぬ。如何となれば余は、前述の如く、敦煌祁連間とは敦煌天山東部カルクタグ附近間の地なりと確信して疑はざるものであるからである。

桑原博士は上掲漢書張騫傳に見ゆる張騫の武帝に説ける言及び同西域傳に見ゆる烏孫王昆莫に説ける言（烏孫能東居故地、則漢遣公主爲夫人云々）中に見ゆる「昆莫地・故地」は史記大宛傳に於て總て「故渾邪王地」と記されてゐることに注意せられ、是を以て烏孫の故地は後ちの匈奴渾邪王の故地即ち今の甘州・漢の張掖に求むべきだと論斷せられたのである（張騫の遠征、（張騫の遠征、續史的研究））。

こは劃期的なる解釋にして、一時殆ど不動の斷案かとさへ考へられたのであつた。

然るに藤田博士は「月氏の故地と西移年代」（東洋學報 十三の四）及び「西域研究」第四回（史學雜誌 三八の四）に於て此の論考に對し重大なる疑問を向けられたのである。即ち藤田博士は昆莫地と渾邪地とは成る程同一であるが、然し肝腎の漢書張騫傳（上掲）が昆莫の地と記してゐるものは其文面を精讀するに、最初烏孫（之は後に説く如く自分は烏孫とは見ぬものだが）が月氏に擊滅せられ、王の遺子昆莫が匈奴單于に救養せられ、後ち昆莫壯となるに及び與へられたる地方を指すものとも見られ、決して之が昆莫の父難兜靡の地即ち眞實の烏孫の故地を指すものと云ふ證據はないと云ふことを發見指摘せられ、此昆莫の地と父難兜靡の地とが同一なりと證明せられざる限り、眞正には烏孫と月氏との兩者の故地間の隣接狀態は遂に解らぬものと考へられたのである。

茲に於て烏孫の故地問題は逆轉して全く不可解なものとなり、従つて之に隣接せりと考へられたる月氏の故地に對しても一點の不明點を残せる儘今日に及んでゐるのである。

果して烏孫の故地は遂に東洋史上の大きいなる疑問として残る外ないのであらうか。而して其につれて大月氏の故地に對しても一點の不明個所を残さねばならぬのであらうか。余は前に考證したる祁連山の位置に關する考證を基にし、更に從來と同じ史料に對し全く別個の解釋を加へて敢て此難問題の解決を試みんと思ふ。

最初に考ふ可きは、從來何人も怪まなかつた處の烏孫は始月氏と共に敦煌祁連間に住したと云ふ事其ものが果して眞正であるかと云ふことである。先づ第一に余は之を否定するものである。何故ならば從來烏孫が月氏と俱に敦煌祁連間に居たとするのは、上掲張騫傳にみゆる騫の武帝に説ける言に基くのであるが、今之を熟讀する時之は決して烏孫の故地の事を話してゐるものでないと云はねばならぬからである。(漢書西域傳に見ゆる騫の言は省略に過ぎて眞意を傳へるものでなく、<sup>⑦</sup>之は無視すべきである)。即ち本文は後世烏孫王となつた昆莫(之は元來王號であるが、此の騫の言一節では一人の固有名詞と見るべきである)の父の難兜靡の國の位置歴史を物語つてゐるのみであつて、何等烏孫の事を言つてゐるものではないのである(史記大宛傳所掲の同じ騫の言は簡單で難兜靡の名も擧げてゐないが、然し其れでも「昆莫之父、匈奴西邊小國也」とあつて、決して之とてもこの小國が烏孫だとは云つてゐないのである。尙漢書張騫傳の騫言では昆莫の父を殺せるを月氏とし亦一體に詳しきに反し、此大宛傳の騫言では匈奴が殺したことになる。又甚略である。此は漢書が史記の誤り及び粗を補正したものであると見る可く、吾々は斯様な點では漢書に據らねばならぬ<sup>⑧</sup>)。尙、烏孫を亡したのは匈奴冒頓であることは匈奴傳の明記する處であるが、此騫の言は繰返し云ふ如く昆莫(後ちに烏孫の故地を與へられて烏孫王となつた者だが元來難兜靡國の王子)の父の事を云つてゐるのであるから、殊に此の誤且粗なる史記大宛傳の騫の言を更に誤り解し以て烏孫の滅亡年代を計

算する様な誤をせぬ様注意せねばならぬ。

脩、上掲張騫の言に見ゆる難兜靡の靡とはトルコ民族に於て常用せらるゝ王の意味なる稱號(Or bey, beg)なることは夙に白鳥博士に據りて唱破せられたる處である。然らば難兜靡は難兜の王の意味に外ならぬ。即ち月氏と共に敦煌祁連間に居て月氏に攻破されたのは烏孫では無く實に難兜國であつたのである。漢書西域傳を検すれば難兜國王治、去長安萬一百五十里。戶五千。口三萬一千。勝兵八千人。東北至都護治所二千八百五十里。西

至無雷三百四十里。西南至罽賓三百三十里。南與婁羌・北與休屠。西與大月氏接。……屬罽賓。

なる一節の存するを發見するであらう。而して之が大月氏(即ち大夏に遷れる後の月氏)に隣接して、罽賓に屬して居ること注

意すべきである。乃ち吾人は明に知る事が出来るのである。月氏は敦煌祁連間に住せる頃難兜國王を殺して其國

を服屬したが

(其時期は難兜王初生の遺子昆莫が匈奴に養はれて壯なる頃月氏の伊犁遷移(後述の如く一七七一—一七六)あり、漢元封中漢の公主の降嫁ありたるも年老なりし爲孫をして尙せしめ幾も無く歿せる事より見て西紀前二〇〇の頃であつたらう)、

其後月氏はバクトリア方面に移住せる時にも之を從へ行つたに相違ないこと、其後勢力の消長

より難兜は月氏の羈絆を離れて罽賓に屬したことを知るのである。<sup>①</sup>之を要するに月氏が敦煌祁連間に俱に居遂に

之を攻併した小國とは烏孫でなくして、難兜國(其詳確なる位置は不明なるも兎に角月氏と匈奴との間に介在せる小國)であつたのである。

而して烏孫國は云ふ迄もなく匈奴に亡ぼされたものである(尤も史記大宛傳の傳ふる粗誤ある張騫の上言を更に誤り讀んで、それを烏孫の匈奴に亡ぼされた史料と誤認してはならぬことは上述の通りである)。匈奴の烏孫征服の唯一にして且確實なる史料は、實に冒頓單于の有名なる書狀

罰右賢王、使之西求月氏擊之。以天之福、吏卒良、馬彊力、以夷滅月氏、盡斬殺降下之、定樓蘭烏孫呼揭及其傍二十六國、皆以爲匈奴。(匈奴傳)

である。即ち烏孫は樓蘭呼揭と共に西方二十六國の筆頭にも數へらる大國であつたが、遂に漢の孝文三十四年の交の匈奴冒頓單于派遣の右賢王によつて併合せられたのである。<sup>⑩</sup>

さて上掲張騫傳の記事にも記されてゐる如く、上述の如く月氏の爲に攻滅せられたる難兜國王の王子昆莫は匈奴單于に養育せられて生長し、數々戰功を建てたので、單于是之をして匈奴西城の守たらしめた。彼は是より其近旁を攻略して遂に烏孫昆莫(王)となつたのである。即ち難兜國王の遺子昆莫は西城地方を攻掠して遂に烏孫昆莫と稱したのであるから、此の西城地方が嘗ての烏孫の地で、烏孫の亡民等多數住んでゐたものに相違ないことが分る。(事實この西城(甘州)の近旁が烏孫の地たりしは史記正義烏孫戰國時居瓜州によりても知らるである)

而して此の西城の地が漢代の張掖、今の甘州であつて、昆莫が伊犁に遷れる後には一時匈奴渾邪王の地となつたものであることは藤田博士の論證せられたる處である。<sup>⑪</sup> さればこそ此の地方に對して史漢が或は「渾邪地」と稱し、或は「昆莫地」と云ひ、さては(恰も烏孫の故地の如く)「故地」と云ふのも當然の事と謂ふ可きである。實に此西城附近こそ烏孫の故地、昆莫の封地・渾邪の封地にして、張騫が匈奴の右臂を斷つべく賂を以て昆莫に歸還せしめんと試みた地なのである。<sup>⑫</sup>

以上の理由に據り、余は所謂烏孫の故地は從來考へられたる如く敦煌祁連間に介在せるものに非ずして、月氏と匈奴の間の地、右賢王が月氏攻伐の途次征服した地、後の匈奴の西城・渾邪王領地、漢の有に歸せる後の張掖郡、即ち甘州地方にあり、而して敦煌祁連の間に相ひ共に存せるは難兜なる一小國に過ぎず、而も之は西紀前二〇〇既に攻併せるものなれば月氏の故地は實に敦煌天山東部間の全地に亘れるものと謂ふ可く、而して當時の狀態より見て西はロプノール畔の樓蘭に接し、東は馬嶺山附近を以て匈奴右部と隣してゐたものと考へる。<sup>⑬</sup>



以上に於て、余は(1)月氏の居住地は、近代長く考へ來られた如く敦煌以東南山間の地域に非ずして、實に敦煌と天山東部間の全地域であること、(2)敦煌以東に月氏が原住せりとなす處の後世文献が假りに真正なる史料たるものとせば、それは月氏が匈奴を壓迫し居たる秦代以前の狀態を傳ふるものと觀るべきこと、(3)敦煌祁連間には烏孫の故地介在せずして却つて難兜國の故地介在し、月氏之を併合したること、(4)烏孫の故地は恩師桑原博士の所説の如く甘州地方に置く可きなるも、其は藤田博士の指摘疑問視したる論考方法を探らずして、別個の觀點より之を得べきこと。以上の四を考證し得たと信ずる。

### 【第二節註】

① 加藤繁博士は「烏孫の居住地に就いて」(史學會講演概要、史學雜誌四二の七)に於て「史記を検すると、大宛傳にも匈奴傳にも月氏が河西に居たとか祁連敦煌の間に居たとか云ふことは全然無い」と云はれたが、此の史記大宛傳大月氏の條に見ゆる「始月氏居敦煌祁連間」は如何に見られるのであらうか。講演概要の事なれば詳しくは解らぬ。又史記大宛傳のみを尊重して、漢書張騫傳を輕視せらるゝ考方に對しても自分は逆に考へる。(⑧参照)

漢書張騫傳の「張騫曰烏孫王號昆莫、昆莫父難兜靡本與大月氏俱在祁連敦煌間、小國也」も亦、本史記の記事に相應じて大月氏の居住地を敦煌祁連間となす史料である。(漢書西域傳が同じく此の張騫の言を「始張騫言烏孫本與大月氏共在敦煌間と約略して引けるは、餘りに約略に過ぎて誤つた意味を傳へるものなるは後述の通である。)

② 祁連を滿洲語の Kulen Kulun ギリヤク語の kolo 等に比定することは白鳥博士「西域史上の新研究」(東洋學報三)、Lauter, Sino-iranica 方壯猷氏「匈奴語言考」(國學季刊二)等の所説である。

恩師羽田教授は、之に反して祁連の語は漢語「天」よりの轉音なることを證明せられ、五胡亂の赫連氏の赫連の如きも同様なりと斷ぜられたのである。(「天と祿と祁連と」史林九の一)。

然るに藤田博士(「焉耆と祁連」内藤博士還曆記念論叢)は此等に全く反對に祁連なる字の原音は天或は滿洲語の Kulun

の音に非ずして、トルコ語 *Seria* (Tras の意) に比定し、唐顔師古の註より出發する祁連山天の考に全然反對せられたるが、(之は殆ど單に祁連が天或は *Kulun* なる音以外に *s'ian, silin* とも讀み得ると云ふ事のみから出發してゐるに過ぎず祁連と天との關係を無視するには極めて根據薄弱と謂はねばならぬ) 兎に角假令祁連に天の意が有るにしろ無いにしろ、余の論考せんとする祁連山と天山との地理的一致の證明が左右せられる譯のものではない。

- ③ 藤田博士(上掲論文)。桑原博士は之に對し深く批判されなかつたが略之を認められた如くである。Franke (Beiträge aus chin. Quellen zur Kenntnis der Türkvolker und Skythen). De Groot, Hunnen der vorchr. Zeit. 等皆然。

- ④ 白鳥博士は居延を以て河名とせられ今の額濟納河とせられたが、之が祁連山に對する位置の比定に重大なる差違を生ずる基となつた如くである。漢代の居延は河名に非ずして澤名なるは太初三年强弩都尉路博德が此處に屯塞を築けるを、武帝紀には「路博德築居延」と記したるも、匈奴傳には明かに「路博德築居延澤上」と記し、其他李陵傳に陵が漢兵八百騎を率ゐて匈奴の内二千餘里に深入して地形を視たる時の事を「過居延視地形」と記し、又天漢二年彼が五千騎を以て居延澤より北方の浚稽山に進撃せる事を「出居延、北行三十日、至浚稽山」と記し、又武帝紀にも之を「出居延北・與單于戰」とする皆居延が南北に長く流るゝ額濟納河に非ずしてそれが注ぐ居延海(嘎順泊)なることを明示してゐる。然れば漢書霍去病傳に見ゆる去病の祁連征伐を賞せる武帝の言「票騎將軍涉鈔者濟居延遂臻小月氏攻祁連山揚武乎饒得」は隴西を出でゝ額濟納河を溯りて居延澤に出で、之を渡れるを云へるなり。小月氏は必ずしも南山に居たものでなく、史記大宛傳の「保南山羌」も羌と雜居した證にはならず、漢書趙充國傳の狼河(小月氏種)の如くロプノール方面に雄勢を張つてゐたものなぞあつたのである。史記大宛傳によれば敦煌祁連間(即ち敦煌天山東部間と考へらる)に居た月氏が、匈奴に追はれて西移した時小衆去り能はざりしものが小月氏となつたものと云ふから、其は居延海から祁連即ち天山間に游牧して居て票騎將軍の軍の通過する地點に居つたものもある筈である。又其が南山羌に保したと云ふが、其年次も未詳で、保したと云ふ意味も明確には分らない。勿論、湟中月氏胡は湟中や青海方面に居たものであるが、其は如何なる經路を経たるものか不明で、後漢書西羌傳の云ふ如くなれば大部隊はバミールを越へて大月氏となつたのであるから、湟中月氏はイリか或はバミ

ル東麓から漸次此處迄移動したものであらう。

又磻得<sup>ニ</sup>張掖は既に顏師古の否定する處で、漢の磻得縣は西域諸國名を以て邊縣の名とせる類例に過ぎぬ。

- ⑤ 隋書吐谷渾傳に「祁連以南、雪山以北、南北二千里」とあるのも、祁連山が北方の山なることを示すものである。同書地理志甘肅張掖郡福祿縣の條に「有祁連山崆洞山崑崙山」とあるは、崑崙山の並記せられてゐるのより見て所謂何々富士何々ラインの類で、本來の祁連に非ずして、今日の祁連山なること明である。

又藤田博士(祁連と焉支)が擧げらるゝ西河舊事の記事に至つては(著者年代共に不明であるが)、或節は祁連と天山の同一を物語る如く、或文は祁連と南山の同一を物語る如く、大いに西河舊事の著者が後世の擬定祁連山と本來の祁連山の相違に不注意なりし結果を暴露してゐるものと思はれる。尙、西河舊事に見ゆる匈奴が祁連山を失ひて嘆げきたる事實は年次不明であつて、果して武帝の遠征時の事なりや或は兩漢の西域經營時代の事を云へるか、或は又鮮卑族によつて匈奴が全領地を奪はれたる時のものか全く不明とせねばならぬ。本始三年田廣明を祁連將軍とせる事件も亦祁連が南山に在らずして天山に在りたる一巨證と謂ふ可し。蓋し斯様な將軍名は浚稽貳師の如く皆攻撃目標に因めるもの。若し祁連が張掖酒泉の南山の如き當時既に漢土となりし地に存せるならば到底斯様の名は附せられぬ筈である。乃ち田廣明は祁連將軍として天山の祁連を攻めイリの烏孫を困めつゝありし匈奴を牽制するに在りたるものである。

- ⑥ 其他舊唐書の「姑臧城秦月氏戎所據」の如きも匈奴冒頓單于時代以前の月氏東方進出の事象を記せるもの。恩師桑原先生は「張騫の遠征」に於て、この涼甘肅瓜沙諸州の月氏占有を月氏が烏孫を併合した結果とされたが、本文に於て論じた如く月氏が烏孫を併合したことを示す史料は無い。然し後述の如く烏孫の故地は先生の所説の如く甘州であつたと考へられるから、月氏が古く斯様に甘涼に延びてゐた時には、烏孫と隣接乃至征服してゐたものと考へねばならぬ。尙、匈奴休屠王の休屠は月氏の同音異寫であるとし、其休屠の地(甘肅省甘涼道)は月氏の故地となす考(白鳥博士「大月氏考」)は、休屠は明かに匈奴の中心種族(單于種)であり(拙著後漢末期より五胡亂勃發に至る匈奴五部の狀勢(史林一九の二)、五胡亂及び北魏に於ける匈奴(史林二〇の三)参照)、賈誼新書事卑篇等には休屠を匈奴の同意語として用ひてゐる程であること

から見ても休屠月氏は適當でないと思ふが、休屠の地が嘗て月氏の勢力下に在つたことは全く其通りであらう。

- ⑦ 同傳では一見明かに烏孫が月氏に亡された如く見ゆるが、之は鶻の言を不用意に抄略した爲に過ぎず、故に之は捨つ可きである。

- ⑧ 漢書は塞外記事に於て史記よりも正確精密なるを普通とする。之は武帝以後極めて頻繁となりし塞外交通の結果に外ならぬ。然しこの張騫の言は同じ人の言であるから本來ならば異つてはならぬ筈である。司馬遷は成程、張騫と同時代であるが、斯様な上奏等の如きは必ずしも同時代の者が正しく知り得るとは限らず、寧ろ後世の史官が奉勅職權を以て祕庫を探りて得たる知識の方が正しい場合が多い。遷は元鼎三年鶻が歿する迄は乘傳諸國を巡歴してゐて（張惟驥太史公疑年考）帝側に居て鶻の上言を聞いたものとは考へられぬ。其後彼は郎より太史公（歷占天文計書檢閱の官）を歴て中書令（樞機の官）に達したが、史記私撰の爲に勝手に天子の政治古文書を開いたとは考へられぬ。故に是の張騫奏上の史漢の相違は漢書の著者班固が後漢明帝の勅命を奉じ、職權を以て東觀に官文書を啓いて得たる史料を以て史記の粗漏を訂補した結果に相違ない。（賈誼其他の上奏類が總て漢書に正確なものも注意すべし）尙、烏孫・匈奴と密接且重大な交渉を有してゐた後漢時代の班固が渾邪王と昆莫とを單に音の類似等から同一のものとして誤認する様なことは全く考へられない。

- ⑨ 西移後の難兜國は、水經注卷二にも、郭義恭廣志曰休循國居葱嶺其山多大葱。又逕難兜國北、北接休循、西南至屬賓國三百四十里と見える。白鳥博士は「大月氏考」（東洋學報三）に於て此國の位置を攷證せられた。烏孫王昆莫は元來烏孫種に非ずして、匈奴單于より還附された父の遺民と西城の地の烏孫故民を以て、塞種の地たる伊犁に迫り月氏を驅逐して之に移つたものであると考へられる。

- ⑩ 昆莫が烏孫の民を率へて月氏を逐斥したことより見ても烏孫の始より大國たりしことは推知できる。樓蘭に就いては縹緲する要もあるまい。呼揭は烏揭とも書かれ其後其王（匈奴に屬して其諸侯的存在となつたものと考へられる）は呼韓邪單于時代に自立して匈奴單于にもなつたこともある國である。ヒルト博士等は、此の呼揭 Huni なる音に Uigur なる名を求むる（Hirth. Über Wolga-Hunnen und Hungnu. S. 270 f, Ann. I）DeGroot, Die Hunnen d. vorchr.

Zeit S. 79 u. 221. 鄯支單于の頃には大いには西移して居た如く鄯支に服屬してゐた。

⑪ 藤田博士「西域研究」第四回。

⑫ 藤田博士は月氏の故地とその西移年代に於て、桑原先生の渾邪地＝昆英説を否定する一證としてこの渾邪の地＝甘州に烏孫を移らしむることは羌と匈奴との交通を斷つが、西域との交通を斷たぬから張騫の云ふ斷匈奴右臂に該當せぬと主張されたが、此は匈奴史の大勢より見ても直に解る處であるが、更に次の明證よりしても妥當でない。

大夫曰胡西役大宛居之屬、南與群羌通。先帝推攘斥奪廣饒之地。建張掖、以西隔絕羌胡。瓜分其授。是以西域之國皆內拒。匈奴斷其右臂、曳劍而走。(鹽鐵論西域四十六)

⑬ 月氏故地の東西境に關しては明記する史料無し。然れ共南北の距離が天山敦煌の間に於て、且つオクザス畔移住後猶控弦一二十萬を有し人口百萬の大夏を從へたる事情よりしても其の故地の廣大ならざるべからざるを知る。史記匈奴傳に「右方王將居西方直上郡以西接月氏羌」と見え且當時右賢王の河南侵入狀態よりして其勢力は納林、北大河流域より西には未だ及ばざりし如くなれば、月氏の東境は恐らく馬鞍山附近に求め得べし。丁謙匈奴傳地理攷證が右賢王の地を新疆に迄入れて考へてゐるが之は誤である。月氏が敦煌祁連間に在りたる間は匈奴は未猶新疆に迄は勢力及ばず、月氏烏孫樓蘭等二十數國を冒頓攻破するに至りて次第に新疆に入るなり。眞に新疆が右賢の領となりしは元封六年の頃よりと考へらる又月氏故地西境は、冒頓が右賢王をして西、月氏を撃破せしめし時、序にロブノール畔の樓蘭を定めたのより見ても略白龍堆附近迄延びてゐたものと考へられる。

### 三、月氏の二三遷移年代

月氏が上説の祁連敦煌の故地を去つて伊犁地方に遷れる年代に關しての Deguignes, Klaproth, Lacouperie, Lassen, Richthofen, Franke, Stein 氏等の説が極めて根據薄弱なる推測に過ぎざるは、夙に白鳥博士の指摘する

處である。

白鳥博士は是の伊犁遷移年代を以て匈奴の老上單于の在位年代に繋けられたのである。即ち博士は其著「烏孫に就いての考」(史學雜誌)に於て

(冒頓單于)は唯だ月氏を破つたのみで、此の民族を甘肅の地より西方に逐ひ拂うて其の地を奪うたのではない。……冒頓の書狀に「滅夷月氏、盡斬殺降下定之」とあるが、之は少しく誇張の氣味を帯びて居るので月氏は此時に打ち滅ぼされたものでもなく又悉く西の方へ逐ひ散らされたものでもない。其は何故と云ふに漢書西域傳大月氏の條に「至冒頓單于攻破月氏、而老上單于殺月氏。以其頭爲飲器、月氏乃遠去、過大宛西擊大夏而臣之」とあり、又同書匈奴傳に元帝が昌猛を匈奴に遣して呼韓邪單于と盟をさせた時に「以老上所破月氏王頭爲飲器者、共飲血盟」とあるので月氏が匈奴に滅ぼされて其餘衆が伊犁の方へ逃れたのは老上單于の時で冒頓の時にはまだ甘肅省に留つて居たのである。

と斷ぜられたのである。之に對して我恩師桑原博士も大いに賛意を表せられ、

(白鳥博士の説は) 要するに月氏の移轉を匈奴の老上單于の在位年間の出來事と(斷定したのである)。月氏の移轉を老上單于の時代とすることは妥當である。(而して)賈誼はその「新書」の匈奴第廿六に

將必以<sub>二</sub>匈奴之衆<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>漢臣民<sub>一</sub>制<sub>レ</sub>之。令<sub>二</sub>千家<sub>一</sub>而爲<sub>二</sub>一國<sub>一</sub>。列處之塞外。自<sub>二</sub>隴西延安<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>遼東<sub>一</sub>。各有<sub>二</sub>分地<sub>一</sub>以衛<sub>レ</sub>邊。使<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>月氏灌竄之變<sub>一</sub>。

と申して居る。彼の意見は利祿酒色を以て匈奴を誘惑懷柔して、漢の邊塞の守備に當らしむるといふに歸する。(之に)据ると彼がこの對匈奴策を建てた當時には月氏は未だ西北方に移轉せずに、依然甘肅の河西地方

を根據として可なりの勢力を有して居つたものと認定せねばならぬ。然らずば賈誼が爾く月氏に對して邊塞を警戒する筈がない。……賈誼が對匈奴策を上つたのは孝文帝の八年（西紀前（一七二））で當時月氏は猶河西地方に居つたものとする、月氏の西北方移轉は自然の結果としてその以後の出來事と斷定せねばならぬ。（即ち）月氏の移轉は孝文帝の前八年（西紀前（一七二））から老上單于の死んだ年、即ち孝文帝の後三年（西紀前（一六一））若しくは後四年（西紀前（一六〇））の間に起つたものと認むべきである。（『張騫の遠征』續史的研究（東洋學報）六の三）に於て

と述べられ、藤田博士も最初「月氏の故地とその西移の年代」（東洋學報）六の三）に於て月氏が河西地方から西の方伊犁に移つた年代は白鳥教授の考説に依り略ぼ定まつたといつてよい。即ちこの事件が老上單于の時に起つたとするのは至當の見解である。……月氏が河西から伊犁に西移したのは史漢の明文に據つて老上單于の時であること固より言を須たぬ。

と贅せられ、唯月氏が伊犁より更に西方大夏に移つたのは老上單于の歿年前後（後述）であると觀られた爲、月氏の伊犁遷移は從つて老上の初期に當つべきだと爲されたのである。

斯様にして月氏の伊犁遷移の年代は以上の三博士の説によりて、皆老上單于の在位年間（尤もこの老上在位年代に藤田博士の間に相違あり。余は全く別個の理由より之を西紀前一七四—一六〇となすこと後節に論ぜし通りである）に繋ぐべきで、唯其以上詳細に其を限定せん爲には、此の桑原藤田兩博士の説の何れかを採らねばならぬとするのが殆ど定説となつた觀があつた。

然るに其後、藤田博士が史學雜誌第三十八篇「西域研究第四回」に於て、從來の諸説と全く異つて月氏の伊犁移住は、匈奴冒頓單于（西紀前二〇九—一七四在位）が月氏に加へたる攻撃（西紀前一七六）に據りて生じたる事態にして、此時月

氏は敦煌祁連間の故地を棄て、北の方伊犁地方に移住せしに相違なきことを論證せらるゝに及び、茲に全く月氏の伊犁移住年次は明確に決定せられたと云つてよい（然し其時月氏の其後の伊犁放棄をも老上單于の時に繋けられしは後述の如く不適當である）。

今同博士の論證を茲に引用することは紙面の關係上割愛するが、其明快なる考證は宜く此難問題を一舉に解決したものである。

然るに同博士は幾も無くして長逝せられたる爲、月氏の伊犁遷移を以て冒頓單于の歿後たる漢孝文帝八年（前二七二）頃より以後に置く可しとせられたる桑原博士が舉示せられたる重要な史料賈誼新書（上掲引用）の處置に就いては言及せられなかつたが故に其後、此の藤田博士の周到なる考證に對しても、未だ信を置かれぬ向のあつたのも甚だ無理からぬ事である。

藤田博士が、月氏の敦煌祁連間放棄、伊犁遷移を以て、匈奴冒頓單于の月氏擊走の時（西紀前一七六）とせられたるは、元來當時の匈奴の西方移動の大勢より見ても又匈奴の樓蘭併合の事實より見ても、左様でなくてはならぬ筈である。故に孝文帝の八年（西紀前一七二）即ち老上單于即位後の頃に上つられたりと考へられる賈誼の言に「匈奴を懷柔して隴西延安の塞外に分地を置かしめ、月氏・灌颺の變に備へよ」と一見如何にも此當時にも猶月氏が河西の地方に強盛を張つてゐた如き様子を物語る一節があるのが元來甚だ不思議なることである。

この誼の上疏の一節は現行本新書の匈奴篇に在る處であるが、漢書賈誼傳に引用せる上疏文中には全く無い處である。元來現行新書は後世の人が勝手に誼の文を解析標置して篇目を立てたものであることは定説である（四庫全書總目要提）其間各所に後人の加筆増入がある如くである。然しこの「備月氏灌颺之變」の一節は通典邊防篇にも賈誼の言として引用してゐるから、假りに之を誼の原文と認めても、之を其の字面通り取る事が出来るか。隴西延安遼



東の塞外と云へば、秦の始皇の築ける臨洮長城即ち甘肅省岷州附近より發する長城であるが、其の塞外に匈奴を千家宛一團として、列置し以て邊防に備へんと云ふのであるから、字面通りに取つても其塞外地方には月氏や灌𪛗は居なかつた筈である(居れば置ける譯はないからである)。然しそれよりも當時北方百蠻の王にして其強盛比するものもなかつた匈奴をば懷柔して、侵寇の事實全く無き月氏灌𪛗を防がしむると云ふ珍策を果して一代の才子と稱せられた賈誼が上疏したであらうか。而も此の灌𪛗とは彼の渾𪛗・渾廋と同一なること定説であるが、此渾廋は夙に漢初匈奴に征服せられたるもので(而も其は匈奴の北に居た種族である)、其後全然漢等とは交渉無きものである。即ち謂はゞ灌𪛗等と云ふものは當時最早實在しなかつた古典的存在と謂つてもよいものである。然ればこの古典的蠻族名灌𪛗と同列に並記せられたる月氏の解釋も亦當然定る筈である。月氏(月支)が古代より大民族であつたことは匈奴との交渉より見ても明であるが、漢民族に取りても亦代表的蠻族であつたことは、爾雅に見ゆる五狄の一に其を置いてゐるのに徴しても明であり、又商書四方令にも其名見ゆること、或は又山海經海内西經の記事に徴しても亦明である。さては彼の逸周書王會篇に見えたる禹氏・穆天子傳に見ゆる(赤)鳥氏も亦月氏の別寫音字なりとすれば、それは益々然りである。<sup>④</sup>然れば彼の歐洲に於て初めてカウカサス北部の一蠻族名なりしスキタイが、後には黒海以東の民族、さては東方全民族の總合名として用ひらるゝに到れると同様に、漢代に於ても月氏なる名が匈奴以外の蠻族の總合名として用ひられしならんことは充分に想像し得る處であり、殊に之が灌𪛗の如き明かに既に滅亡せるものと並記せられぬる場合に於ては、左様の意味に受取らねば到底理解し得ない譯である。

要するに、此の誼の上疏文の一部として傳へらるゝ「備月氏灌𪛗之變」の珍策は厭く迄其誼の原文なりや否や怪む可きものなるも、假りに一步を譲りて之を眞の誼の言としても、決して實在の蠻族を指示せるものに非ずし

て、單に古典的雅名を列舉して文を飾れるものに過ぎぬと解する外ないのであつて、之を以て月氏灌竈が孝文八年(西紀前一二七)の如き後世にも猶極めて強盛で漢の邊境間に居て漢を脅かしてゐた史料と爲すことはできないのである。即ち單にこの新書の怪む可き一節を以て匈奴の西方發展の明なる事蹟を否定したり又月氏の伊犁遷移年代を、孝文帝三十四年交に於ける冒頓單于の月氏擊破當時となす斷案を否定することは出来ないといはねばならぬ。要之、月氏の敦煌祁連山の住地放棄、伊犁遷移は從來考へられたる如く匈奴の老上單于の時に非ずして其前代冒頓單于の西方發展(西樓蘭に到る迄を版圖にしたことに對する注意が從來の論考に足らぬと思ふ)時(西紀前一七六)に在つたと斷ぜねばならぬのである。

### 【第三節註】

- ① 安馬彌一郎氏「月氏の西方移動に就いて」史學雜誌四三の五等。尙駒井義明氏「前漢に於ける匈奴と西域との關係」が月氏の敦煌祁連山放棄を冒頓の第一次擊走(西紀前二〇〇頃)に繋げられたるは、烏孫昆莫(昆莫は王號なるも此場合一個人と見ねばならぬ)の年齢より逆算して得る月氏の敦煌祁連山の強盛(難兜國の攻併、西紀前二〇〇頃より昆莫の壯年に至る間)の狀態より見ても同意し兼ねる。又冒頓單于是左程年老で歿したものでないのは、即位の経緯、在位年限及び高后への有名な嬖書からも推察できる。
- ② Chavannes, Les pays d'ocident d'après le Weiho. 白鳥博士「周代の戎狄」(東洋學報一六)。DeGroot, Die Hunnen der vorchr. Zeit. S. 61. 余は史記衛將軍票騎列傳に「都尉韓說・從大將軍出窺渾」と見え、漢が後に窺渾縣なるものを置いたこと(地理志)「二字が倒置」を合せ考へ、元來渾(渾)と窺とは近接せる二族であつたと想像する。
- ③ 九夷八蠻六戎五狄謂之四海(爾雅)五狄、月支穢貊匈奴單于白屋(同上疏)。
- ④ 小川琢治博士「先秦北支那蕃族考」(内藤博士還曆記念論叢)。

## 四、月氏の三放棄

月氏が上説の如く二三に移住してより後其が再び之を放棄して西遷した事情は大體次の根本的史料、即ち史記大宛傳の

及冒頓立、攻破月氏。至匈奴老上單于、殺月氏王、以其頭爲飲器。<sup>①</sup>始月氏居敦煌祁連間。及爲匈奴所敗乃遠去、過宛、西擊大夏而臣之。遂都媯水北、爲王庭。

及び漢書西域傳の

(月氏)本居敦煌祁連間。至冒頓單于攻破月氏、而老上單于殺月氏、以其頭爲飲器、月氏乃遠去。過大宛、西擊大夏而臣之。都媯水北。爲王庭。

及び漢書張騫傳の、騫が武帝に言へる處の、月氏に殺されたる難兜靡の子昆莫が匈奴單于に、養はれて生長したる後に月氏に報復せる事情

及壯以其父民衆與昆莫使將兵數有功。時月氏已爲匈奴所破、西擊塞王。塞王南走遠徙。月氏居其地。昆莫旣健。自請單于報父怨。遂西攻破大月氏。大月氏復西走。徙大夏地。昆莫略其衆、因留居。兵稍彊、會單于死。不肯復朝事匈奴。匈奴遣兵擊之。不勝。益以爲神而遠之。

の解釋に依りて定まるものである。

此漢書西域傳殊に史記大宛傳を牽爾に讀む時は、恰も老上單于の時、月氏は祁連敦煌間の故地より直ちに西方Oxus河畔の方へ移れる如く速斷せらるゝも、實は上節に述べたる如く月氏は冒頓單于の時に既に敦煌祁連の故地を追はれて、此の漢書張騫傳に見ゆる如く塞王の地即ち伊犁の地方に遷つたが、更に老上單于の爲に擊破され、月氏王の頭は飲器とされ、又嘗て其昔月氏が攻殺したる難兜靡の遺子昆莫が烏孫王となりて之を攻破したの

で遂に月氏は伊犁の地をも棄て、西走し、やがて Oxus 河畔に達したものと見る可きは、藤田博士(西域研究 第四回)の論斷せられたる通りである。

然し乍ら同博士が此老上單于の攻破と昆莫の報復とを同時のものとし、月氏が遂に伊犁を棄て、西遷したのは匈奴老上單于の在位年間たる西紀前一七四—一六一であつたらうと考察されたのは遽に賛成し難い。と云ふのは故桑原博士が提示せられたる處の、其後西紀前一三九武帝の建元二年に漢と月氏との同盟を結ぶ可く張騫が月氏に向けて出發した途中匈奴に捕へられたる時、匈奴單于是張騫を詰つて

月氏在吾北。漢何以得往使。吾欲使越。漢肯聽我乎。

と云つてゐるのより見ても、月氏は當時猶匈奴の北(羅針盤的に云へば西北だが)即ち伊犁に居たものと認めねばならぬ。若し月氏が當時既に中央亞細亞に移つて居つたならば、匈奴單于是「月氏在吾西」或は「在吾西南」と謂ふべき筈である。従つて月氏の西遷は張騫が發足した西紀前一三九より後、彼が匈奴に拘留されてゐた十年間に起つたもの(張騫は後匈奴を脱出して中亞に移れる月氏に到達した)、寧ろ匈奴は漢が月氏と結んで已に對抗する意圖あるを知つたので、烏孫を使喚して月氏を急に逐斥したものとも考へられる」と云ふ意味の論考(張騫の遠征)との牴觸を解決されてゐないからである。即ち藤田博士は前に「月氏の故地と西移年代」に於ては、此の桑原博士の論考を取り上げて此に反對せられてゐ、又此「西域研究第四回」に於ても自説老上單于在位年間説を強調せられてゐるけれども、尙充分に其牴觸を解決せられてゐないからである。

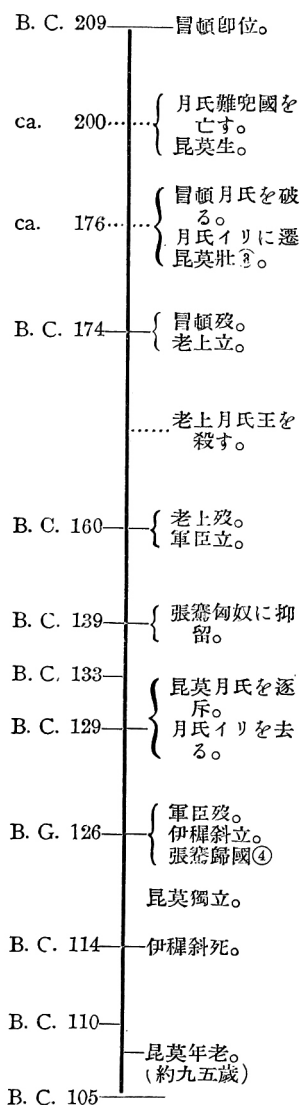
藤田博士は桑原博士の提示せられし單于の言(上掲)「月氏在吾北」は漢と月氏との交渉を喜ばざる單于の謂はゞ外交上の懸引と見る可く、之を以て直ちに月氏の所在を示す史料と爲すことは出來ないと主張せられたのであ

る。然し其様に漢と月氏との交通を妨げん爲の言葉で、且實際廿數年以前に伊犁より逐斥し了つてゐたものならば、寧ろ其を語つて、漢の意圖の甚だ見當違ひなるを諱し、其企を諦めさすのが普通である。まして西紀前一六〇以前の老上單于時代に實際月氏の西遷があつたものなら、漢が其を廿數年も經た西紀前一三九の頃にも未だ知らぬ筈はないのである。漢と匈奴との軍臣單于の即位以後に於ける極めて密接なる關係は到底左様な悠長なものではない。趙王と匈奴との密約・景帝の通交關市・公主の降嫁・武帝の關市饒給・單于の長塞下往復等々、斯様な匈奴の誇るべき大慶事大敵月氏の擊走は、前の冒頓の如く誇示しなかつたとしても當然漢の方へ傳はつてゐたと見ねばならぬ。之等から考へても張騫の出發當時は未だ月氏は伊犁に居たと考へる方が妥當なのである。

又、藤田博士は烏孫昆莫に關する騫の言（上掲漢書張騫傳）は總て騫が匈奴に挿留されてゐた時見聞した事を云つたもので、其内に見ゆる「會單于死不肯朝事匈奴云々」も從つて彼が匈奴に抑留されてゐた間に起つたものと見ねばならぬから、此單于是軍臣ではなく（何故なら此單于の死後直ちに騫は匈奴を脱出して居たから）、老上に相違ない。又烏孫昆莫が其後、漢より公主を迎へた時の年老の狀態（漢書西域傳下）から見ても、月氏を匈奴及烏孫の伊犁より逐斥したのは老上單于の時代であるとすべきだとされたが、然し張騫の言を精讀すれば必ずしも其總てが匈奴在留中に起つた事のみであるとは考へられず、言中の單于を老上でなければならぬとし得る丈の理由は存しない。又烏孫昆莫の年齡關係より見る時は寧ろ其單于是老上でなくして軍臣となす方が、より適應するのである（下掲表參照）。

斯様に見來る時は、桑原博士の主張する通り、月氏の西遷は張騫の往途に於ける匈奴抑留の西紀前一三九・一二九間に在つたとなす方を妥當とすべく、斯く見ることは決して他の事情と相矛盾するものでないことを認めねばならぬ。が然らば更に精密に、此の張騫抑留中の如何なる年代に、月氏西移年代を置く可きか。桑原博士は

然し此様な嚴密な時期は兎も角として、月氏のイリ放棄は張騫の匈奴抑留時代たる西紀前一三九・一二九間で



あつたことには殆疑を容れる餘地無しと斷ぜねばならぬ。即ち月氏のイリ退去の事情は、始め匈奴の老上單于の在位年間（白鳥博士は此在位年を一七四—一五八とし、桑原・藤田博士は一七四—一六一とされたが、之は一七四—一六〇と見ねばならぬ<sup>⑤</sup>）に月氏は匈奴の爲大打撃を蒙り、其王は斬殺されて頭蓋骨を盃にされたけれども、猶暫くはイリ地方を保つて居た。然るに次の軍臣單于の時代の丁度漢使張騫が匈奴に抑留せられてゐた一三九—一二九の頃、嘗て昔月氏が攻殺した難兜國王の遺子昆莫は生長して、單于より亡父の故民を興へられ匈奴が其昔攻併した處の烏孫の土地を守らさしめられたので、其近傍を勢力下に入れ烏孫昆莫と稱してゐたが、月氏に對する舊怨を復す可く、單于の許を得て遂に月氏を撃ち之をイリより逐斥し、其地を奪ひて烏孫國を建て、其勢は甚強盛となつたが、當時匈奴は未だ軍臣單于の在位中（冒頓・老上・軍臣三單于時代が匈奴の黄金時代）で完全な獨立は出来なかつた。然るに軍臣死して相續争ひ起りて匈奴の勢力稍動搖するに際し、昆莫は遂に獨立し朝會をも肯ぜざるに至つたと解釋すべきである。（未完）

#### 【第四節註】

① 老上單于是月氏王の頭蓋を以て盃を作つたのである。「匈奴降者言、匈奴破月氏王、以其頭爲飲器」（漢書張騫傳）。「漢使者韓昌張猛」與單于及大臣俱登匈奴諸水東山……以老上所破月氏王頭爲飲器者、共飲血盟（同上匈奴傳下）は之に對應する事實である。髑髏盃の事は別に研究がある。

② 漢書西域傳下「烏孫國、大昆彌治赤谷城……本塞地也。大月氏西破走塞王。塞王南越縣度。大月氏居其地。後烏孫昆莫擊破大月氏。大月氏徙西、臣大夏。而烏孫昆莫居之。故烏孫民有塞種大月氏種云」は即ち伊犁の地方が塞——（大）月氏——烏孫の順に占められたるを謂ふものである。

③ 曲禮上に「人生十年曰幼學、二十曰弱冠、三十曰壯有室云々」とあり、昆莫を西紀前二〇〇の出生とせば二十五歳、二〇

五の生とせば丁度三十歳にて漢書の「及壯云々」に一致する。

- ④ 張騫の出發歸國年次を直記せる文献はない。Richthofen 氏が Brosset 氏譯の大宛傳により、當時の通説一三六—一二三を排し、一三九—一二七としたるは (China. I. S. 449) 當時としては一段の進歩なるも、之は桑原博士の考證の如く、一三九—一二六とすべきである。

- ⑤ 白鳥博士が、史記匈奴傳が孝文帝後元二年 (西紀前一六二) の匈奴漢の和親を記せるに續けて

後四歲。老上稽粥單于死、子軍臣立爲單于。……軍臣單于立四歲、匈奴復絶和親、大入上郡雲中、各三萬騎。

とあるに據りて、老上の歿年を文帝後二年より四歲後の後六年 (前一五八) に當てられたるは、桑原博士の指摘せられたる如く適當でない (張騫の遠征)。然し乍ら桑原博士が東晉徐廣の史記註に據りて、之を後元三年に當てられたるは、既に藤田博士も注意せられたる如く、徐廣の註は史漢本紀の文により匈奴の上郡雲中入寇が後元六年の事に屬し、而して之が軍臣立四歲に當るを以て逆算して得たる結果に過ぎずして、根本史料と認め難ければ、直に之を用ゆるは妥當でない。次に藤田博士は漢書匈奴傳が史記を改めて後四歲を「後四年」に作り、立四歲を「立歲餘」と作つてゐるのは、本紀其他の傳ふる史實にも略合するから之を採り、老上の歿年は漢書匈奴傳に據りて文帝後四年 (前一六〇) か、或は徐廣の如く三年 (一六一) とすべきなりとせられた。

然し余は老上單于の歿年は史料的に見て必ず文帝の後四年 (前一六〇) とせざる可らずと考へるものである。而して余が此の後四年説を主張するは全く三個の理由を有するからである。〔第一〕前人が最も解釋に困みたる上掲史記匈奴傳の「後四歲」は、全く「後四年」の誤寫にして、史記原本は漢書と同様「後四年」たりしこと確實なる明證あることを發見したからである。(史記匈奴傳徐廣註に「孝文後元七年崩、而二年 (後元二年の意) 答單于書。其間五年、而此 (史記本文) 云後四年 (老上の歿年)」、又立四歲、數不容爾也。」とあるは、少くとも東晉の頃迄の史記本文が、正しく後四年となつてゐたことを明示するものである。即ち後四歲は後人の誤寫なのである。〔第二〕藤田博士が前後年代と合致すとなす漢書の「立歲餘」は、實に後人の改竄に過ぎずして漢書原本は史記と同様「立四歲」であつたとせねばならぬことを發見したからである。



張楚金唐撰翰苑(京都帝國大學文學部景印舊鈔本第一集所收)註所引の漢書匈奴傳は誤脱あるも、間々現行漢書の不全を補ふ處あり、此の「立歲余」も實に史記と同じく「立四歲」としてゐる。即ち少くとも唐顯慶太和年間以前の漢書原本は史記と同じく「立四歲」であつたと見ねばならぬのである。(第三)吾人は此の如き史記原本・漢書原本に循ひて、老上の歿年を後四年とすべく、而も史漢兩原文の記する軍臣立ちて四歲、匈奴大いに上郡雲中に侵寇を恣にせることは、決して前人が困惑した如く矛盾あるものでないと思ふべきことを主張するからである。史記孝文本紀は「後六年冬匈奴三萬人入上郡、三萬人入雲中……數月胡人去、亦罷」とあるが、更にその侵入開始の詳細なる年次は、六年の十一月なること、漢書天文志に據りて明なり。而して此侵寇が上揭本紀の記事の文字通り數ヶ月にして終つたとは考へられぬ。(漢書本紀は史記に反して數月胡人去・亦罷の七字を削る。史記匈奴の傳が匈奴軍が冬十一月に侵入して直に去つた如く「大入上郡雲中各三萬騎、殺略甚衆、而去」と記し、而も胡騎代句注に入ると記して相矛盾あるは誤である。漢書匈奴傳が此の而去の二字を削除せるは當然の事である)。即ち同本紀にも後七年に於ける匈奴侵入を記し、更に景帝本紀には匈奴傳にも見ゆる代郡への侵入を景帝元年に繋げてゐる。更に漢書景紀によれば、景帝元年夏四月に、漢は御史大夫嚴青翟を遣して和親を請ひ而も、恐らく匈奴の容るゝ處とならなかつたのであらう翌二年十二月に又々和を請うてゐる。詰り匈奴の侵寇は決して後六年(前一五八)のみでなく、後四年老上死し軍臣立ちてより四歳の後七年(前一五七)に於ても極めて激甚にして、寧ろ最頂點とも解せられるのであつて、斷じて史記及び原本漢書匈奴傳が軍臣立四歲大入上郡雲中と爲すと、老上の歿年を後四年となすとは矛盾衝突するものに非ずと云ふのである。

以上の三事由よりして自分は斷然老上單于の歿年は西紀前一六〇と斷定するのである。(但し斯くなす時は史漢匈奴傳の「後歲余文帝崩、景帝立」は後元七年の事實に合せざるも、然れども此の「後歲余」を文字通りに計算せば、假令軍臣の入寇を本紀其他の如く後元六年と爲すとも後元七年の實際に合せざれば、之こそ史漢の誤記に相違ない。)

匈奴が征服せる種族に他族出身の王を置けることは、漢人衛律をして丁令王とし、其族人を統治せしめし例等より見てわかる。